

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 夏目漱石の文学的現場 意識と思考の焦点

氏名 藤澤るり

夏目漱石は『三四郎』においてそれ以後の彼の小説の幾つかの技法の基礎を作った。その『三四郎』の方法の生成の場と考えられる作品として、『漾虚集』の「琴のそら音」と『夢十夜』の「第八夜」が挙げられる。「琴のそら音」は、『文学論』の意識の焦点とその推移という概念の応用として書かれ、その成果は『三四郎』の主人公三四郎の行動を、それを生じさせる彼の「識域以下の意識」を隠蔽して記す方法の基盤となった。また、『夢十夜』の「第八夜」においては、『草枕』『虞美人草』で漱石が行ってきた小説の方法から、「摩訶不思議」ではなく「尋常」を書く『三四郎』の方法への転換の方向性が示された。

漱石は『三四郎』において主人公三四郎を「単純」化して示した。三四郎は主体的な行動を取れない、女性に対して適切な返事もできない青年として記述されているが、それは巧妙に仕組まれた記述によって三四郎の意識を読者から隠蔽することによって実現された。三四郎が美禰子に対して主体的、意識的にとった行動を、宛も彼が事態を理解せず、殆ど無意識にとった行動であるかのように示す方法である。漱石はそのために、【(1)〈美禰子からの働き掛け〉→(2)〈三四郎が「田舎者」であることの強調〉→(3)〈三四郎の行動〉】という三段階構造を用いた。(1)と(3)の間に三四郎が「田舎者」であることを強調する(2)を挿入し、彼は〈美禰子からの働き掛け〉に対して不器用な対応しかできないという印象を読者に与え、それによって(3)の三四郎の行動が〈美禰子からの働き掛け〉を実は拒んでいることを読者から隠蔽した。

この「単純」化の操作によって、「<sup>ストレイシブ</sup>迷へる子」のような、可視化されない言語化不可能な領域から発した〈美禰子からの働き掛け〉を主体的に拒む三四郎の意識が隠蔽された。三四郎が拒まずに受け入れたのは、「三拾円」のような計測可能、言語化可能な働きかけの方だった。三四郎は一見美禰子を恋しているようであるが、もし、恋が可視化される領域だけではなく可視化されない言語化不可能領域の交流を含むなら、三四郎はこの領域からの美禰子の働きかけを拒んでいる、すなわち愛していないことになる。この三四郎の恋にお

ける複雑な意識構造を隠蔽し、それを一見「単純」な主人公のこととして漱石は書いた。この手法により実現したのは、『虞美人草』が個人をバラバラな状態でしか描けなかったのに対して、三四郎、美禰子両者にとっての相手の意味、すなわち個人の関わりの相互性を表現できたことである。

『虞美人草』の方法からこの『三四郎』の方法への転換とその確立は、この時期に漱石が行った二つの講演、小説の主題を検討した「文芸の哲学的基礎」から小説の叙述に注目した「作家の態度」への転換と軌を一にしている。

『三四郎』の発展形として、個人の意識の向け方を模索する『それから』『門』が書かれた。この主題は『彼岸過迄』においては、個人が他者をいかに対象化できるかという問題となる。『彼岸過迄』の前半には対象化の仕方<sup>に</sup>に問題のある田川敬太郎が、後半には対象化のされ方<sup>に</sup>に問題のある須永市蔵が登場する。敬太郎は「停留所」「報告」の過程を経ることによって、他者の正しい対象化を行うことに成功した。しかし、須永は対象化のされ方<sup>に</sup>が生涯の最初から狂っていた。父と小間使いの子として生まれ、家族親族から独特の意識を向けられていたからである。そのため、義母が彼と結婚させたがっている従妹の千代子との関係は複雑になるが、漱石はその問題を徹底的に追求することなく『彼岸過迄』を終結させ、この主題を『行人』に持ち越す。

『行人』においては、長野家という家族的空間における他者の対象化が問題にされる。一郎二郎の兄弟のうち、二郎はそれまで彼にとって自明であった長野家の構成員たちの対象化が、兄一郎と兄嫁直によって大きく揺るがされ、ついには長野家という家族的空間からはじき出される事態に陥る。一方、兄の一郎にとっては長野家の家族的構成員のみならず、彼以外の他者すべてが対象化困難な存在であったが、特に妻の直によってその孤独は極限にまで追い詰められる。一郎にとっての他者の対象化とは相手の「霊」「魂」「スピリット」を掴むことであったが、友人Hさんと旅に出て自身の内面について語り、Hさんから知的かつ適切な対応を受けることによって、一郎の問題が変質する可能性の端緒が示される。しかし、『行人』ではまたもや孤立した個人の群像が描かれた。

『行人』から『心』への転換は、『虞美人草』から『三四郎』への転換をなぞる。『心』は「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」の三部構成であるが、この三編は、『三四郎』で指摘した三段階構造を持っている。すなわち、(1)に当たる「先生と私」と(3)に当たる「先生と遺書」の間に(2)に当たる「両親と私」を挿入することによって、「先生と私」に接続してすぐに「先生と遺書」が書かれた場合に生じたであろう事態を糊塗した。『三四郎』においては(2)で三四郎の田舎者性が強調されたが、『心』においては、その(2)に当たる「両親と私」の舞台はまさに私の実家のある田舎である。その田舎で「私」と死に瀕した「父」との交流が書かれ、「父」と「先生」が「私」にとってそれぞれどういう存在であるかが明らかにされる。

「先生と私」「先生と遺書」の考察において、本論では「何うして」「何故」という問いに注目する。なぜなら、他者を対象化する意識の様態は、他者に向ける問いであるこれら

の語の使用に端的に表れるからである。「先生」と「私」の関係はまさに、「先生」の「何うして……、何うして……」という問いで始まるように仕組まれる。漱石は『文学評論』『序論』において、「どうして」(How)と「何故」(Why)の相違を説明した。『彼岸過迄』『行人』においては、この二つの問いの形式は明確に書き分けられている。「何うして」はある事態が「如何なる過程」<sup>プロセス</sup>によって生じたかを問う問いであり、「何故」は理解不能、不可解な他者の言動に向けられた問いである。しかし、「先生と遺書」で記述される若き日の「先生」はこの二つの疑問詞を奇妙に使用する存在であった。すなわち、「何うして」は「何故」と問うべき状況で「何故」の代わりとして使用し、一方、「何故」は、外部の他者に対してはただ一度を除いて正しい問いとならず、内部では自身の行動に対して、何故あんな行動をしてしまったのかという激しい悔恨とともに使われていた。つまり、「先生と遺書」における「先生」は、「何うして」と「何故」の使用において未成熟な存在であり、特に他人を理解不能、不可解な他者として対象化する「何故」という問いを発することのできない存在であった。彼が「先生と遺書」で起こしてしまった事態とその後の状況は、それ故に引き起こされたと考えられる。

この「先生」の「何うして」と「何故」の使用は、「先生」が「私」と出会ったことによって変質する。唐突に近づいてきた「私」は「先生」が正しく「何故」を向けざるを得ない存在である。しかも「私」は「先生」の「何故」を素朴にただ繰り返すことによって「先生」に深い安心を与えた。「先生」はかつてたった一度正しい「何故」を友人Kに向けて発し、自身の運命を狂わせられる恐ろしい答を与えられていたからである。「私」との交流の中で「先生」の「何故」は正しい「何故」へと修正されたが、「先生」がその「何故」を自身に向けて〈何故自分は生きているのか〉という問いとして発したことが「先生」に自殺を決意させた。

次作『道草』において漱石は、妻に「何故」という問いしか向けない男として主人公健三を設定した。彼は妻御住を理解不能、不可解な他者としてしか捉えず、彼女の行動が「如何なる過程」<sup>プロセス</sup>を経てなされたかということに関心を向けていない。一方、妻の御住が健三に向けて発する問いは〈何うして(何故)～してくれないのか〉という、健三に不満を訴える形式を取っていたが、養父島田、養母御常と関わる健三に対しては、健三以外の第三者がそこに介在するために彼女は正しく「何うして」を使用した問いを向けた。しかし、まだ彼を理解不能、不可解な他者として対象化した上での「何故」という問いは発せなかった。この二人の状況は、健三が島田、御常を徐々に対象化出来始めたことと出産場面の共有が、彼らの間に新しい往復を生じさせたことによって変質し、健三は御住に「何うして」という問いを、御住は健三に「何故」という問いを向けられるようになる。

この達成を踏まえた『明暗』は、四つの強烈な「何うして」によって始動する小説である。すなわち、津田が医者に向けた「何うしてそれが分るんですか」、自身に向けた「何うしてあんな苦しい目に会ったんだらう」という問い、そこから発せられた「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう」「此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう」という四

つの強烈な「何うして」である。津田の身体に向けられた第一、第二の「何うして」は『明暗』の基調低音となり、第三の「何うして」だけが『明暗』において展開を与えられ、その先には第四の「何うして」の展開が予想される。『明暗』最後半部において、津田は清子と再会し、彼の第三の「何うして」は変化を開始する。津田は清子に〈何故あなたは自分ではなく関さんと結婚したのですか〉という問いを発しなくてはならないが、そのためには、内部でのみ清子に向けていた第三の「何うして」を外部化しなくてはならなかった。それを試みる津田は、自身の膨大な内部を『吾輩は猫である』によって外部化した漱石と相似形を取る。漱石は作家としての最後に、自身が小説家として行ったことを小説の主人公のこととして書く段階まで達し、そこで作家としての生涯を終えた。